

対魔忍
ユキカゼ
TAIMON YUKIKAZE
対魔忍魔調教に墮つ

立ち読み版



プロローグ	
第一章	魔液、塗布
第二章	処女喪失
第三章	陵辱の宴
第四章	宴の果てに
エピローグ	

登場人物紹介

Characters



みずき

水城ゆきかぜ

新世代の戦力と期待される若き対魔忍。強力な雷撃弾を発射する二丁拳銃を用い、電撃の対魔忍の異名を持つ。勝気で負けず嫌い。



あきやまりんこ

秋山凜子

ゆきかぜの通う学園の先輩対魔忍で、達郎の姉。剣術「逸刀流」を皆伝した太刀の使い手。ゆきかぜを妹のように可愛がっている。

あきやまたつろう

秋山達郎

対魔忍として修行中である、凜子の弟。ゆきかぜとは幼馴染みであり長い間、互いを思っているが友達以上恋人未満の関係。

いがわ

井河アサギ

最強の対魔忍と目されている存在。現在は政府によって設立された対魔忍養成学校・五車学園の教師を務めている。

(喉……苦しい……チンポに……チンポに殺されるっ！)

圧倒的な質量の肉塊に口を塞がれた対魔忍のスレンダーボディに脂汗がドッ！と噴き出した。

「最初は苦しいだろうが、じきに慣れる。喉や食道でも快感を得て絶頂できるように、身体を造り替えてあるからな」

かろうじて呼吸ができる余裕を残しつつ、リアルは苦悶に震える少女の口と喉を巨根で犯す。

グチュグチュという淫音と、切れ切れにえずくゆきかぜの苦鳴が混じり合って室内に響く。

「げふっ！ おごっ！ ごぼおおおおっ！」

喉奥を突き刺され、苦しげにえずいたゆきかぜの口から、唾液混じりの嘔吐物が溢れ出す。

「おやおや、嘔吐はするなと言っておいたはずだぞ。胃液がチンポに染みて、ヒリヒリするではないか、このゲロ吐き豚め！」

冷酷な男は、白目を剥いて痙攣する少女の様子にはお構いなしにイラマチオの速度を増してゆく。

皮下脂肪にだぶついた男の腹が、褐色に日焼けした少女の顔にビチャビチャと打ちつけられ、ざらついた陰囊が唾液に濡れた顎と唇を叩いた。

「んふううう、ぶじゅつ、じゆるつ、ずちゆるるつ……ぐ……んぐ……じゆるるつ……じゅばっじゅばっじゅばっ……」

喉陵辱が続くうちに、ゆきかぜは、喉の力を抜く方法を会得していた。

小さな口をいっぱいに開き、無心に頭を振りたくって、口腔を蹂躪する肉凶器に奉仕する。

（気持ちいい……喉、犯されるの気持ちいい……頭、ジンジンして、チンポの舌触りが……美味しい……もつと、もつと奥ッ！ 奥まで来てえ）

苦しげだった呻き声に艶めかしい響きが混じり、なすすべもなく受け止めるだけだった注挿に合わせて、頬を窪ませて吸引する。

「ようやく馴染んできたようだな。処女を失う前に、精液の味を知っておくのも悪くないだろう」

ゆきかぜの口腔内で、巨大な亀頭がひときわ大きく膨れあがった。

（ああ……シャセイ、される？ 精液……お口に出されちゃう……）

絶望感と同時に、被虐の悦びがゆきかぜのスレンダーボディを震わせる。

「出すぞ、こぼさずに飲め！」

邪悪な笑みを浮かべたリアルは、口腔内まで亀頭を引き戻し、苦悶に震える舌に密着させて射精の引き金を引いた。

びゅくんっ、どふううっ、びゅくるるるっ、どびゆるるるびちやああーッ！！

力強く脈動する巨根から放たれた白いマグマが、口腔内に溢れ返る。

鼻傷しそうな熱さが舌を覆い尽くし、むせ返るようなスペルマの臭気が鼻孔を突き抜けた。

「んぐむふううう……ゴフツ、ゴポツ……ぐふううう……ンツ!!」

苦しげな呻きを上げた少女の頬が、ぶちまけられる汚液の圧力でポコツ、と膨らみ、細い喉が無意識のうちに動いて、汚辱の粘液を呑み込んでゆく。

(苦イッ! 喉に絡んで……うえええ、また、吐いちやう……んんんっ!!)

「いい飲みっぷりだな、だが、まだまだ出るぞ」

目を見開き、苦しげに呻くゆきかぜの口から、飲みきれなかったスペルマがビュルビュルと噴き出し、褐色に日焼けした顔を汚した。

射出を終えた巨根が、粘液の糸を引きながら、少女の口から引き抜かれる。

「はあはあはあはあ、うく……んぷ……あ……あふう……う……ううう……」

喘ぐたびに、青臭いスペルマの臭気が立ちのぼり、不快な苦みが舌に粘りついて、汚辱感がこみ上げてくる。あまりにも大量の精液を飲まされたせいなのか、腹の奥で熱い塊のようなものがグルグルと渦巻いていた。

(ダメ……お口じゃ……ダメええ……オマンコに……子宮にセーエキ欲しい、チンポ欲しいい!)

「ご主人様あ、ご奉仕……できたから、チンポ……チンポ挿れてください……オマンコが

切なくて……このままじゃ狂っちゃうっ！」

口腔に粘りついていた精液を、ゴクリと音を立てて呑み込んだ対魔忍の少女は、大きな目に涙を浮かべ、憎むべき男の膝にすがりついて挿入をねだってしまう。

「合格点にはほど遠いが、まあいいだろう。お前の身体は、精液の味と臭いでさらに発情を強めるようになってる。これ以上焦らすと、本当に狂ってしまっただろうからな」

改造の効果を知っている男は、予想通りの反応を示すゆきかぜのもの欲しげな顔を満足げに見下ろしている。

「ベッドに上がれ！ 自分でオマンコを開いて、チンポをおねだりするんだ」

「は、はい……ふあああ……。ご主人様のおつきいおチンポで、わたしの淫乱オマンコを貫いてください、はやくう！ あんっ！ もっ、もう、ガマン、できない……チンポお、チンポくださいいいい！」

言われるがままベッドに上がり、仰向けになった蛙のような破廉恥な開脚姿勢を取ったゆきかぜは、火を噴きそうに熱く潤んだ秘裂に指をかけ、くばあ、と左右に割り開いて挿入をおねだりする。

（私……リアルなチンポをおねだりしちゃってる!! 処女なのに……すっごいエッチな恰好で、チンポ挿れて欲しがってるよお！）

わずかに残った羞恥心が少女の心を掻き乱すが、欲情を極めた肉体は、もう後戻りできないところまで追い詰められていた。

もの欲しげに収縮する膣口から、白濁した愛液が噴出して、ベッドのシーツを濡らす。

「達郎君のチンポでなくていいのかな？」

残酷な中年男の問いに、ゆきかぜの顔が強ばる。

「たっ、達郎？ ひぐううう、……いつ、いいのお！ 達郎はここにいないし、もう、もう待てないから、早く、早くチンポ挿れてください、お願いしますご主人さまあ！」

一瞬の迷いを見せたものの、秘裂をさらに大きく割り開き、尻を弾ませて挿入を哀願するゆきかぜの目には、リアルな巨根しか映っていない。

（チンポ欲しいチンポ欲しいチンポ欲しいっ！ ゴメンね達郎、私、チンポ挿れてもらわないと狂っちゃうから……任務を果たせないから……）

自分でも苦しいとわかりきっている言い訳を胸の内ですぶやきつつ、少女はスリムに引き締まった肢体をくねらせ、蜜まみれの膣口をパクパクと開閉させて男を誘う。

「よかろう、お前が達郎君のために守ってきた処女、俺がいたたくぞ」

でつぶりと太った中年男の裸身がのしかかってきて、硬く猛った巨根が、挿入を待ちわびる秘裂にヌルリ、と擦りつけられた。

（あああつ！ 来るッ、チンポ来るうううっ！）

「ふああ、ああああんッ！」

硬い肉胴に勃起クリトリスを逆撫でされただけで、軽いエクスタシーに舞い上がったゆきかぜは、まるで最愛の恋人と抱き合うかのように、リアルの脂ぎった裸身に抱きつき、

贅肉のたっぷり付いた太い胴に褐色の太腿を絡めてしまう。

「そんなにチンポが欲しいか？ そおら、くれてやるぞ……」

少女のしおらしい行動にニヤリ、と卑猥な笑みを浮かべた中年男は、ぐいつ、と尻を突き出した。

指でさんざん掻き回され、蕩けた膣口をグプリと割り開いて、巨大な亀頭がめり込んでくる。

「ひゃああああうんっ！ チンポお、チンポ入ってきたあ、もつとお、もつと、奥ツ、奥までズブウウツツて来てえええ！」

焦らしに焦らされた挿入願望が理性の壁を打ち砕き、ひたすらに牡を求めるように改造された肉体と脳が、奴隷娼婦の本能剥き出しで辱悦の奈落へと墮ちてゆく。

「そんなに急かさなくても、すぐに奥までプチ込んでやる……きついオマンコだな」

今まで男を受け入れたことのない未踏の膣内に、極太の肉杭がズブズブと潜り込む。巨大な亀頭がついに処女膜にまで到達し、これまで守り通してきた乙女の証をメリメリと押し破った。

「くわああああんっ!! 痛いいいいいっ」

破瓜の苦痛に仰け反ったゆきかぜの目が、驚きに見開かれる。

「あひい……んあ……やあああ……いつ、痛いの……処女膜破られてるのにきもひいいい！」

処女膜を引き裂かれる激痛はそのままなのに、脳がそれを壮絶な快感として認識しているのだ。

肉槍の穂先に圧迫され、ミチミチと引き裂かれてゆく粘膜襲の痛みが、次の瞬間には、息もできぬ程の悦波となって背筋を這い上がってくる。

処女膜の名残を亀頭冠がズリズリと擦り、新たな出血が膣内に溢れ、注挿で掻き出されて股間を伝う感触でさえ、腰が抜けそうに気持ちいい。

「どうして……痛いのが、どんどん気持ちよくなって……変になっちゃうッ」

巨根に貫かれた身体をくねらせて、恍惚の声を上げるゆきかぜ。

「それも脳改造の成果だ。今のお前は、どんな刺激や苦痛も快感に変換してしまう。そうら、もつと激しく犯してやるぞ！」

処女を散らしたばかりのヴァギナを、巨大なペニスがフルストロークで蹂躪する。

引き裂かれた処女膜が、極太ペニスに容赦なく抉られ、愛液混じりの鮮血が、結合部からジュープジュープと淫音を立てて噴き出した。

「くひゃあああんっ！ チンポきもひいいい！ あひ、いつ、ゴリゴリつてきてるうう！ あひひひひひひひ——ンッ!!」

荒々しい抜き挿しのたびに、頭の芯までズンッ、ズンッ！ と突き抜ける激痛が、気が遠くなりそうなエクスタシーの突風となって、ゆきかぜの意識を絶頂へと舞い上がらせる。「ふむ……。鍛えているだけあって、締まりは上々だな。オマンコをチンポに擦られる感

想はどうだ？」

「きつ、きもひいいい！ チンポッ！ チンポいいいいッ！ んやああああ、イクツ、イクツ、イクツ、うああああ、イツちやううう——っ！」

鮮血混じりの愛液で、純白のシーツを染めながら、スレンダーボディが狂乱する。

「そうだ、もっと感じろ！ お前がチンポ無しでは生きていけない淫らなメス豚だということ、俺がたっぷりとわからせてやる」

皮下脂肪に弛んだ中年男の下腹が、スリムに引き締まった少女の股間に激しい肉打ちの音を立ててぶつかり合い、極太のペニスが、初々しいピンク色の膣穴をめいっぱい割り開いて注挿される。

「ひあふううっつ！ あぎっ……いつ……あっ……ああああっ！」

リアルな肥満体の下で、しなやかな肢体を仰け反らせたゆきかぜは、初めて体験するピストン快感に褐色の美貌を蕩けさせる。

「しゅごいいいいい！ これ、チンポ凄い凄いイイインッ!!」

これまでの愛撫とは桁違いの、深く、重く、強烈な悦波に翻弄された対魔忍の少女は、絶え間ない嬌声を上げて全身をガクガクと震わせた。

愛する達郎のことも、彼女の痴態を見ているであろう凜子の存在も脳裏から吹き飛び、ただひたすらに快楽を求める淫らな牝の本能だけがゆきかぜを支配している。

（気持ちいい……オマンコスコスされるの、凄い、きもひいい……チンポ好き……犯

されるの、だいしゆきいい……)

「クククッ、いい表情をしているのではないか。そおら、まだまだ狂わせてやるぞ！」

これまで何百人もの女を快樂地獄に叩き込んできた百戦錬磨の巨根が、緩急にグラインドも交えた巧みなピストンで、ゆきかぜのヴァギナを容赦なく掻き回す。

「おひいいいっ！ 奥っ……きもひいい！」

「そうだ、これが本当のセックスの快感だ。お前は幸せ者だぞ。この快感をたっぷりと楽しめる、奴隷娼婦という職業に就けるのだからな」

脂ぎった中年男の巨根が、スレンダーボディの上で律動するたびに、巨大な亀頭が子宮口を連打し、全身が甘く蕩けるような腹膜性感の波紋を発生させる。

「幸せえ……？ これがホントのせつくしゅ」

虚ろな声を上げるゆきかぜの唇が、リアルな生臭い口に塞がれ、太く分厚い舌がヌロリ、と侵入してくる。

「あぐ……んぐんふうううむ……んっ、くちゅ、くちゅ、くちゅ……」

赤黒い男の舌と、奴隷娼婦の刻印を浮き出させた少女の舌が、軟体動物の交尾のように、激しく淫靡に絡み合う。シロップのように甘い唾液が残らず吸い取られ、ドロリと粘った男の唾液が注ぎ込まれた。

(キス………されてる。こんな、こんな奴に……全部奪われて、犯されて……でも、気持ちよくて……私、ダメ、ダメになっちゃう……ッ！)



あぐらをかいた男の上で、肉感的なヒップが重たげに上下し、呑み込んだ男根を媚粘膜で搾り上げ、扱き立てる。

幸いと言うべきか、凜子のヴァギナに挿入された勃起は、真性包茎で凹凸にも乏しく、長さも太さも貧弱なモノであった。これまで幾度も受け入れてきたリアルな巨根や、極太デルドゥと比べると、あまりにも物足りない挿入感だ。

いつもの彼女なら、辛辣な言葉で陵辱者の自尊心を折ってやるところだが、今日の相手は怒らせたなら本気で殺されかねない。

（大丈夫だ……私はまだ理性が残っている。何とかして、ゆきかぜの負担を減らしてやらねば……）

人垣の向こうから聞こえてくる苦悶の喘ぎ声を聞きながら、凜子は思う。

小柄で華奢なロリータボディが男どもの嗜虐心を煽るのか、ゆきかぜの方に半数以上の陵辱者が群がっていた。

とはいえ、凜子の方も、決して楽な状況ではない。左右の爆乳は休む間もなくこね回され、両手には挿入の順番を待ちきれぬ男根を握らされている。

凛々しくクールな顔にも悪臭を放つ亀頭が擦りつけられ、長い髪や、脇の下までもが自慰の道具として利用されていた。

（ゆきかぜ……任務のため陵辱を受け入れているのだろうが、あのままでは本当に責め殺されてしまう……ここは私が……）

「おっ、おい、お前たち……」

ゆきかぜを犯す順番待ちをしている男どもにも、凜子は声をかける。

「何だよ!? こつちが終わったら、おめえもガッツリ犯してやるから待ってるよ!」

「私の胸で、果ててみないか? この乳房で……パイズリしてやるぞ!」

男の上で身体を揺らしながら、たわわなバストを強調するように胸をせり出して上下左右に揺れ弾ませ誘惑する。

「それもそうだな……どつちにしろ両方犯すんだ、おめえのデカパイでしばらく遊ばせてもらうぜ」

爆乳美少女の淫靡な誘いに乗った連中が、凜子の方にやってきた。

「そらよっ! あつちのド貧乳じゃ、パイズリなんて絶対に無理だからな!」

ヴァギナに呑み込んでいるのよりもずっと見事な浅黒いペニス、爆乳の狭間に突き挿れられる。

「あ、ああ……奴隷娼婦のパイズリで、チンポ汁を残らず搾り出してやる……」

脇を締め、肉槍を挟み込んだ凜子は、ヴァギナを突き上げられる反動を利用して、パイズリ奉仕を仕掛けた。しなやかに鍛え上げられた胸筋を、弾力たっぷりの皮下脂肪ときめ細かな乳肌で包み込んだ極上の爆乳が、猛り狂った牡器官をふんわりと包み込んで縦横無尽に揉み廻る。

（これならば、私はさほど乱れずに、男どもを果てさせられるはず……一人でも多く、一

回でも多く射精させれば、それだけ楽になる)

冷静沈着な凜子は、打算を秘めた爆乳で、牡臭い勃起を抜き立てる。

「くおぉ！ こいつは気持ちいいパイズリだぜ！ さすがは元対魔忍の奴隷娼婦だ、乳肉の弾力が違う！」

「そつ、そうだろう？ まだまだ、もつともつと気持ちよくしてやる。あふ、はむ、ちゅばちゅばちゅば……れるっ、ぴちゃぴちゃぴちゃ……」

ニヤリと凄艶な笑みを浮かべた凜子は、乳肉の狭間から突き出された亀頭の先端を吸いついばみ、見せつけるように舌を突き出して鈴口のワレメを舐め回す。

「いつ、いいぞ！ そつ、そのまま続ける！」

敏感な部分をネットリと這いくすぐる生温かい舌の心地良さに身を強ばらせながら、男は興奮に上ずった声で命令する。

「ああ、わかった……もう、先走りが溢れてきたな。あふ……じゅるっ、ずちゅるるるッ！ んふ、濃い汁だな……ちゅぶっ、ちゅばちゅばちゅばちゅばっ！」

わざと大きな吸い音を立てて先汁をすすり込みながら、上目遣いに男の顔を見上げると、荒い鼻息を漏らした男は、今にも射精してしまいそうになるのを必死で堪えている様子だ。

(この策、行けるぞ！)

効果を確信して内心ほくそ笑む凜子の周囲を、勃起の群れが取り囲む。

「何だ？ すぐにパイズリしてやるから……おっ、おいつ、待てというのに！」

「たまんねえ！ オレはおっぱいそのものをオマンコとして使わせてもらうぜ！」

「ヒヒヒッ、じゃあ、こっちはオレが……」

クールな美女のエロチックな流し目に欲情を煽られた連中が、勃起をしゃくり上げさせながら群がってくる。

「えっ？ アッ！ あはあんッ！」

ツンと尖り勃った勃起乳頭を押し込みながら、左右のバストに勃起が突き挿れられた。

たわわなバストは、勃起の工程までを柔肉の内側に呑み込み、極上の弾力で押し返して、男どもの乳辱ピストンに反撃する。

「こいつは十分乳マンコとして使えるぜ。チンポの穴に乳首が入ってきて気持ちいい！ ポリユーム満点で、突きごたえもたまらねえ！」

「んあ、あひんっ！ 乳首が……あつ、熱イッ！ あはああう……んっんっんううううッ！」

性感の塊として開発された乳球を、三本のペニスに責め立てられ、伶俐に整った対魔忍の顔が蕩けた。

（パイズリ奉仕ならと思ったが、乳首がいつも以上に感じてしまう!! ああ、胸の奥が……震えている……）

亀頭のワレメに啜え込まれた左右の勃起乳首は、きついヴァギナに挿入された童貞ペニスのような歓喜に包まれ、今にも弾けそうに脈打っている。

ぐちゅ……ぐちゅ……ぐちゅ……ぐぷっ……くちゆるっ……じゅぶっ……。

「んっんっんっ……んはっ……くううう……」

先走りの粘液が鳴る音を立てながら、弾力過剰な乳肉が突き刺されると、凜子の口から悩ましげな呻きが漏れてしまう。

「おいおい、楽しそうなことやってるじゃねえか」

乳辱の様子を見た男たちが、ゆきかぜを犯す輪から離れて凜子の所にやってきた。

（そっ、そうだ……もつと私に寄ってこい……そうすれば、ゆきかぜが楽になる……）

「おい！ 手が止まってるぞ！ しっかりやれ、クソメス豚ッ！」

手コキ奉仕を受けていた男が声を荒らげ、凜子の頬を平手打ちした。

「くう……わっ、わかった……」

打たれた頬の痛みで、胸の疼きがわずかに逸らされたことに小さな安堵を覚えながら、乳奴隷娼婦は、勃起を抜き上げる手指の蠢きに熱を込めた。

その手に握った刀で、幾多の敵を切り伏せ、斬鬼と恐れられた美少女対魔忍の繊細な指が、牡の悪臭をムンムンと立ちのぼらせる肉柱を愛撫する。

冷たく滑らかな指は、裏筋を撫で揉み、亀頭のワレメを圧迫しながら擦り上げて、クチュクチュという淫音を立てながら先汁を掻き回した。

「くうう、本気になったらなかなか上手じゃねえか。あの斬鬼に手コキ奉仕させられるなんて、夢にも思ってみなかつたぜ」

「冷たくってスベスベの指でチンポシコシコされると、気持ちよすぎて腰が抜けちまいそうだ。おほお！　そこを……もつと擦るんだ！」

奉仕を受けた男どもが、脂ぎった顔を快感に歪ませながらあざけりの声をかけてくる。

「んっ……今の私は対魔忍ではない。奴隷娼婦だ……だから、チンポに最高の快楽を与えるのが仕事……どうだ、気持ちいいだろう？」

クールな口調で言いながら、凜子の白い指は、左右から突き出された勃起に絡みつき、緩急交えたストロークで扱き立てた。

（私の技巧で、何人もの男どもが感じている……こういう感覚、嫌いではないな）

男どもに寄ってたかつて捌られ、妊娠させられようとしている危機的状况にもかかわらず、凜子は不敵に微笑んでしまう。

「勝ち誇った顔してんじゃねえよメス豚！　パイズリとフェラも真面目にやれ！」

凜子の口元に浮かんだ笑みをめざとく見つけた男が、再び頬を叩く。

「んあ！　あ、ああ……はぶ、んちゅ、ちゅばちゅばちゅば……はむ……ッ！」

従順に頷いた奴隷娼婦は、パイズリの動きを速め、突き出た亀頭を大胆な舌使いで舐めしゃぶる。

（少し調子に乗りすぎたか？　ここは言われるがままに奉仕して、男たちを一人でも多く射精させる！）

先ほどのデイルドゥ訓練の延長線上と考えた凜子は、無心になって勃起を扱き、胸と唇

も駆使して快感を送り込む。

「チンポ一本じゃ、淫乱メス豚は満足できねえだろ？ 口で綺麗にするんだ！」

「そうそう。チンポの味比べだぜ！ 隅々までこつて舐めるんだぞ！」

悪臭を放つ勃起の群れが、凜子の鼻先に突きつけられた。

「く……揃いもそろって、臭くて汚いチンポばかりだな。私の口で綺麗にして、中身も残らず吸い取ってやる……んっ、くちゅ……」

吐き気を催しそうな悪臭を放つ亀頭に舌を這わせ、付着した汚れや体液を丹念に舐め取ってゆく。

「いいねえ。それじゃあボクも、本気出して勃起させようかな……」

ヴァギナに挿入した男が、意味ありげな言葉を発した次の瞬間、挿入していることさえ忘れていた貧相な包茎ペニスが急激に勃起し始めた。

「くぁ！ なっ、なんだ……ッ?! いきなり、おっ、大きくッ?!」

膣内の異変を悟った凜子が顔を引きつらせ、機械的に上下動させていた豊臀を緊張させる。

「フフッ、ボクのチンポ、二段階勃起するんだよねえ……ほおら、もうすぐ亀頭が出るよ。オマンコ、裂けないように力を抜いた方がいいよ」

太さと長さを倍以上に増した包茎ペニスがズルリと剥け返り、包皮の下に隠されていた亀頭冠が膣壁を圧迫しながら、ぐんぐん膨らんでゆく。

「くあ、うあああ！ あぎいいいいいッ!!」

キノコの笠のように大きく広がった亀頭に膣壁を抉られた凜子の絶叫が響き渡る。

(こっ、こんなに広がるなんて……まるで、本物のキノコ……。引き裂かれるッ！)

膣内で直径十センチ以上のサイズに広がった巨大亀頭の圧迫感に、さすがの凜子も悶絶寸前だ。

「ボクのこと、粗チンだってバカにしてただろう？ これからが本番だよ！」

男が腰を突き上げ、激しい注挿が開始された。

「くわああああッ！ イッ……ひっ……ひぎいいいいッ！ きっ、きついッ！ 抉られるウウウんんんッ!!」

凶悪に張り出した亀頭冠に、膣壁の柔壁をビリビリと掻き鳴らされた凜子は、冷静沈着な物腰をかなぐり捨てて狂乱してしまう。

男のペニスは、まさに笠が開ききった毒キノコの様相を呈していた。茎に当たる部分は、並の男根よりやや太い程度のサイズなのだが、亀頭だけが異様に大きく張り出している。

じゅぶりゅりゅっ……ぐぼっ、ぐぼっ、ぶぶぶりゅっ……びびびっ、ぶじゅじゅじゅじゅっ、ごぶぶぶぶぶっ！

ストロークのたびに、凜子のヴァギナが放屁のようなはしたない音を奏で、熱い湿り気を帯びた甘酸っぱい淫臭が、ムワッ！ と香り立つ。

勃起の胴と亀頭の段差があまりにも大きすぎるため、注挿によって膣内に送り込まれた

空気が、卑猥な音を立てて掻き出されているのだ。

「ぎやはははっ！ オマンコが屁こいてやがるぜ！ もっと恥ずかしい音を出しな！」

ぶびいいいいっ！ ぶぶぶぶぶうっ！ びぶぶぶううっ……ぶびいいいいっ！

キノコ巨根の男は、腰使いを巧みにコントロールして、クールな対魔忍のヴァギナに、放屁音そっくりの恥音を奏でさせる。

「やあああッ！ やっ、やめろ……あひんっ！ こんなのは……ああああ……ッ！」

泣きそうな声を上げた凜子は、女体楽器の恥ずかしい演奏を止めさせようと身を振るが、他の男どもに寄ってたかつて動きを封じられた。

（ああああ、恥ずかしい音がしている……この音、ゆきかぜにも、みんなにも聞かれています……！）

見物人たちの野卑なヤジや口笛を圧して響き渡るヴァギナの放屁音は、冷静沈着な少女を羞恥の炎で炙る。

音だけではない。過剰なサイズの亀頭に掻きむしられた膈壁が灼熱の摩擦快感に包まれ、突き上げられた子宮が腹膜全体を圧迫して、息を呑むような快感を発生させた。

「あひあああ……らっ、らめええ……ッ！」

怒濤の勢いで押し寄せてくる悦波に、凜子の美貌が崩れた。パクパクと酸素不足の鯉のように喘ぐ口から、奴隷娼婦の刻印が浮き出た舌が突き出され、喜びの涎が溢れて形のいい顎を伝う。



頭部を覆っている革覆面は、目の部分はメッシュ生地になっていて、男性の方からはゆきかぜたちの姿が見えているらしい。

「この男は、奴隷娼婦に童貞を奪って欲しいといって志願してきたのだ。どうだ、こいつを可愛がってやるか？」

「これで……ホントに、終わり？」

先汗に濡れ光ってヒクついているペニスを値踏みするように見つめながら、ゆきかぜはリアルに念を押す。

「ああ。そのかわり、奴隷娼婦の技巧でたっぷりと搾り取ってやるんだぞ」

虚ろだったゆきかぜの目が、獲物を見つけたメス猫のようにギラリ、と光る。

「奴隷娼婦に筆下ろしさせるなんて、変態なんだね……いいよ……やる！」

「ゆきかぜだけに、やらせるわけにはいかないな……私も……やるぞ」

凜子も、男どもの体液にぬめ光るクールな美貌に、淫蕩な笑みを浮かべて若者へとじり寄った。

「ンンンッ！ ンンンン〜!!」

凄絶な色香を放つ二人の姿に怯えたのか、磔になった男は小さく身じろぎしながら呻く。

「にゃはああ、そんなに怖がらなくていいよ。カワイイチンポ。優しくしてあげるからね」

膝立ちになったゆきかぜは、下腹にめり込みそうに勃起したペニスに頬ずりする。

生乾きのザーメンがこびりついたままの日焼け顔が、ヌチャヌチャと粘音を立てて肉茎

と戯れ、新たに漏れ出した先走りが少女の頬を濡らした。

「……このチンポ、美味しそうな匂いにする」

「これが童貞チンポの匂いか。初々しいな」

二人の奴隷娼婦は、勃起に息を吹きかけ、指先でつついてイタズラする。

ひゅくつ、ひゅくつ、と敏感にしゃくり上げるペニスからは、彼女たちを陵辱していた男たちのような敵意は微塵も感じられない。

「ねっ、ねえ、先輩、舐めてもいいですよね？」

「ああ。射精させないように、手加減するぞ」

純粹な奉仕の欲求に突き動かされた奴隷娼婦たちは、童貞ペニスに顔を寄せる。

くちゅ……ちゅび……ぬろおお……。

左右から差し伸べられた二枚の舌が、硬く反り返った肉柱に吸いつき、唾液の痕を残しながらゆつくりと這い上ってゆく。

十秒以上の時間をかけて、亀頭の手前まで達すると、今度は舌の裏側で肉胴をジグザグに舐めくすぐりながら滑り降りる。

「んむうううう……くむううううんッ！」

声を封じられた若者は、くぐもった呻きを上げ、今にもはち切れそうに充血した勃起をバネ仕掛けのようになしゃくり上げた。

「先輩、このチンポ、凄く敏感でカワイイ」

「手加減して舐めないで、すぐに弾けてしまえそうだ」

奴隷娼婦の契約を結んで以来、初めて純粹な責め役に回った二人は、新鮮な獲物をじっくりと嬲りにかかる。

「んは、あふ……びちゅ……れるっ……あはあ、ちゅっ……びちゅ……」

「はふう……んふううう……んっ……ちゅむっ」

往復で感觸の異なる竿舐めが幾度も繰り返され、硬く張り詰めた若い肉竿を二人分の唾液でヌラヌラと濡れ光らせた。

「んっ……ぐっ……んぐむううう……」

最も敏感な龜頭を避けた生殺しの快感に、覆面姿の若者は呻くばかりである。

「すごい、先走りチンポ汁、射精してるみたいにプチュプチュ出てる……」

焦らし責めに反応して苦しげに脈動する若牝の肉柱をウツトリと見つめつつ、ゆきかぜはもの欲しげに舌なめずりする。

（どうしてだろう、このチンポ、すっごく惹かれる。んんんっ……チュパチュパしゃぶりしたい！ ザーメン飲みたい……オマンコの奥まで、ズゴズゴって突いて欲しい！）

自分でも不思議に思える淫らな衝動がこみ上げ、エロチックな褐色ヒップが切なげにくねる。充血したままの秘裂の奥から、愛液混じりのザーメンが糸を引いて滴り落ちた。

つい先ほどまで、過剰なほどハードな陵辱に晒されていた少女のスレンダーボディには、肉欲の残り火が今もなおくすぶり続けているのだ。

「まったく、締まりのない童貞チンポだな。どれ、少し味見してみよう……ちゆるッ！
んふ………」

先に我慢の限界に達した凜子は、濡れ光る亀頭に唇を寄せ、表面張力で盛り上がった先汁にキスして、少年の愛液を吸い取った。

「くちゅ……はああ、美味しい……」

とろみの強い先汁を舌の上で転がした爆乳奴隷娼婦は、塩辛い淫味に恍惚の笑みを浮かべる。

「んああ、先輩、ずるい！ 私も……びちゅ、ちゆるるるッ！」

凜子に負けじと亀頭に口づけしたゆきかぜは、頬をすぼめ、はしたない音を立ててガン汁を吸い上げた。

「……………!!」

尿道内を満たしていたカウパー腺液を残らず吸引された若者は、強烈すぎる快感に身を振りながら、声なき悲鳴を上げる。

「ちゅく……んふ……はああ、フレッシュで美味しいよお、このチンポ汁、今まで飲んだ中で一番美味しい！」

ぬめった唇をはしたなく舐め回しながら、ゆきかぜは初々しい体液の味に興奮した声を上げる。

（チンポ欲しい！ でも、焦らした方が気持ちいいから……もつと、もつと焦らしてから

……オマンコに啞え込んで……いっぱい射精してもらうんだ……)

ヴァギナの奥底で狂おしく燃え上がる挿入欲求を抑え込んだ少女は、新たな攻撃目標を定める。

「今度はこっち……二個あるから、先輩と一つずつ。れるっ……びちゅ、ちゅば、ちゅばちゅばっ……あむ……んふ、くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅっ」

「フフッ、可愛らしいタマだな……あむっ！ちゅば、んふ……じゆるるッ！」

二人は、勃起の根本で硬く引き締まった陰囊に吸いつき、内包されたうずらの卵サイズの睪丸を舌先で弄び、口に含んで舐め転がす。

「クフウウウー！」

男の急所である敏感な肉クルミを優しい舌使いで舐め転がされ、吸いしゃぶられる快感に、若者の身体が強ばった。

「お前、結構筋肉質だね……オマンコズコズコしてもらうのが、楽しみ……でも、その前に、もっともっと可愛がってあげる」

会陰部にまで顔を潜り込ませたゆきかぜは、尻たぶの狭間に舌をねじ込み、硬く引き締まったアヌスの蕾にまで奉仕する。

「ンホオオ！ オフッ……ングムフウウー！」

アナルを舌先で小刻みに舐めくすぐられた若者は、猿ぐつわに塞がれた口から歓喜とも拒絶ともつかぬ呻きを漏らし、拘束された身体を震わせる。

「あふっ……お尻の穴、気持ちいいんだ？ ヒュクヒュクしてるよ。お前も、やつぱり変態男だね……もつと舐めてあげる」

ゆきかぜがアナル舐めに夢中になっっている間、凜子は身体を伸び上がらせ、たわわなバストを若者の腹筋に擦りつけながら、胸板を撫で回す。

「本当に、よく鍛えられた身体をしているな。実戦的な筋肉だ……んふ、ちゅっ……」

小さいながらもコリツと尖り勃った乳首に口づけし。甘噛みを交えて舐め転がしながら、反対側の乳頭を指先で撫でくすぐって刺激する。

「これ、気持ちいいだろう？ フフフッ、乳首をこんなに硬くして……変態め！」

クールな物腰を取り戻した凜子は、サディスティックな口調で言葉廻りを仕掛けながら、左右の乳首を責め立てる。

「あはあ、男でもお尻感じるんだあ……もつと奥まで、舐めてあげる……んふ、くちゅ、くちゅ、ちゅぶ……んふ……ちゅくちゅくちゅく……」

責める悦びに目覚めたゆきかぜは、キュッ、と筋肉質に引き締まった若者の尻に鼻先を突っ込み、執拗な舐めに屈して脱力したアヌスに舌先をねじ込んで掻き回す。

「ンフウウウ、フウウウ、クフウウ」

若者の顔を覆ったマスクの下から漏れる荒い吐息に、あからさまな欲情の響きが混じり、しゃくり上げる勢いが増した勃起が、先走りの滴を散らしながら下腹を連打した。

「ねっ、ねえ、先輩、そろそろ射精、させちゃいましょうか？ 私、こいつの精液飲みた

巧みな亀頭責めを受けた勃起がひとときわ激しくしゃくり上げ、若者の身体が筋肉の軋む音が聞こえてきそうな程ガチガチに硬直する。

必死に射精を堪えているのは明らかであった。

「童貞のくせに、凄いガマンしてる……そんなに出し惜しみしなくても、何度だつて射精させてあげるよ。とどめ、刺しちゃうんだから！」

限界まで張り詰めたがらも、頑なに絶頂を拒む童貞ペニスに興奮したゆきかぜは、程良いサイズの亀頭にむしゃぶりついた。

「一人でいいところだけ持つていくんじゃない！ 私も……あふ、ちゅばちゅばちゅば……今にも弾けそうじゃないか」

先走りを溢れさせる鈴口のワレメに、ゆきかぜと凜子の尖らせた舌先が交互に潜り込んで掻き回し、熟練した尿道愛撫のテクニクを競い合う。

「ンゲウウウウ！ ソンソソソソウウウウッ!!」

数十秒の間、全身を強ばらせて耐えていた若者であったが、怒濤の勢いで送り込まれる快感に屈する。

びゅくんっ！ びゅくびゅくびゅくんっ！ ぶびゅうううっ！ びゅろおおおっ！
どびゅるるるうううッ!!

制御不能の脈動を起こした童貞ペニスの先端から、濃縮されたスペルマが一本の白紐のように繋がって射出された。

最初の一撃は、顔を寄せ合つて尿道口を責めていたゆきかぜと凜子の顔に粘りつく。

「ああ、セーキ出たああ……あふ、あむ、ちゅぱっ、じゅるっ、ずちゅるるっ！んはああ、おいひい……もつとお、もつと射精してええ」

「ずっ、ずるいぞゆきかぜ、私も……はうっ……んくんく……ちゅばちゅばちゅば……こんなに美味いザーメンは初めてだ」

白濁液を射出し続ける亀頭を交互に口に含んだ元対魔忍たちは、舌に熱く粘りつく精液の味に酔いしれながら、さらなる放出をねだつてフェラチオ奉仕を続けた。

射精の余韻に疼く鈴口が小刻みな舌使いで舐めくすぐられ、硬度を失わぬ肉茎を横啜えにした唇が、絶妙の圧迫を仕掛けながら上下に扱き滑る。

「フグウウウ……ウ……クハアウウウウ！」

奴隷娼婦のテクニク全開で責め立てられた童貞ペニスは、立て続けに射精の脈動を起こし、若者ならではの濃厚なスペルマを高々と噴き上げた。

「どうしてだろう？ こいつのチンポ汁飲むと、子宮がキュンキュンする」

スペルマに化粧された日焼け顔を色つぼく蕩けさせたゆきかぜは、スリムな肢体を切なげにくねらせる。

「今度は、オマンコで搾り取つてあげる。ご主人様、この男を降ろしてください」

精いっぱい媚を含んだ笑みを浮かべ、奴隷娼婦になりきった少女はリアルに懇願した。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!

三次元
MISS BLACK 特製抱き枕カバーの情熱も感じるよ!

ドリームガゼン

成年向け雑誌
奇数月の特集
性転換

偶数月
17日発売

95円

三次元ドリームガゼン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

魔法の10月 原案執筆ササキユウジ

アズール

12
680円

奇数月
12日発売

アズール

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

コミックプリズム vol.6
440yen

はや

イツちゃんぞ

不定期
発売

はやコミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

クメガミクライシス

強く美しいヒロインが
淫びに堕ちる
アンソロジー!

奇数月
中旬発売

クメガミクライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム [Click](#)

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!! ※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

